Fate/Another night

萩村和恋

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

日本の田舎の都市、四季山市でソレは開催された。
あるものは己が欲望の為に
あるものは一族の悲願のために
あるものは偶然
己が目的の為に争って、その先に見るのはなんだろうか。
コレは、もう一つの運命の夜のお話。
三つのルートがありますので、まあ楽しんで言ってくださいな。

目　次

～Ｂｒｉｇｈｔ　Ｄｒｅａｍｓルート～

（ヒロインは夢原唯乃）

聖杯戦争だよ！全員集合！壱　―　1
聖杯戦争だよ！全員集合！弐　―　11
聖杯戦争だよ！全員集合！参　―　20
聖杯戦争だよ！全員集合！肆　―　29

～Ｂｒｉｇｈｔ　Ｄｒｅａｍｓルート～（ヒロインは夢原唯乃）

聖杯戦争だよ！全員集合！壱

サイド???

「素に銀と鉄。　礎に石と契約の大公。

降り立つ風には壁を。　四方の門は閉じ、王冠より出で、王国に至る三叉路は循環せよ

閉じよ。閉じよ。閉じよ。閉じよ。閉じよ。

繰り返すつどに五度。

ただ、満たされる刻を破却する

――――告げる。

汝の身は我が下に、我が命運は汝の剣に。

聖杯の寄るべに従い、この意、この理に従うならば応えよ

誓いを此処に。

我は常世総ての善と成る者、
我は常世総ての悪を敷く者。
汝三大の言霊を纏う七天、
抑止の輪より来たれ、天秤の守り手よ――――！」
暗闇が支配する空間の中、１人の幼い見た目の少女が呪文を唱えていた。
暫くすればこの街、四季山市ではとある儀式が行われる。
少女もその儀式に参加する一人であり、今宵は相棒とも言える者を召喚すべく今、こうして魔法陣の前で呪文を唱えたのだ。
「さて、どんなのが来るのかなぁー。」
ワクワクとした様子で待つ少女、魔法陣が光り出し、そして姿を現したのは……
「何故余をこの姿で呼んだのだ……魔術師の少女よ…！」
何故か怒ってる闇に溶けるような黒い貴族服のオジサマだった。
いや本当になんで怒ってるの!? 触■■■■の書物と自分の血液媒 !? 触媒が悪いの!?
「あっええと本当にごめんなさい！本当ならランサーで呼びたかったんだけど……そう、触媒！触媒が無くて…本当ならこんなつもりじゃなかったの！」
と、勢いよく少女に男は毒気を抜かれたのか、はたまた諦めたのか（後者は明らかに違うだろう、男の伝承的に）、自己紹介を始めた。

「まあいい、余は狂戦士（バーサーカー）の英霊（サーヴァント）だ。良いか？余は不思議な技を使うがソレは吸血鬼とは何ら関係の無いものだ。良いな？良！い！な!?」
「えっ？あっ、はい！わかりました！」
「そして余を吸血鬼扱いしない事だ！良いな!?わかったら返事をしろ！」
「わかりましたーア！」
「よし！」
こうしてここに少女の魔術師とオジサマの２人組が誕生した。

サイド主人公
ここ四季山市は田舎であり土地が無駄に広いとてもいい所だ。俺、烏丸紅灯（からすまあかり）はこの土地に十六年住まう花を生きる男子高校生である。
そして、俺にはもうひとつの顔がある。
俺は魔術使いなのだ。といっても空を飛んだりなんかできないし姿を消せることなんて出来ない。起源は『希望』と『変化』。属性は火と風、魔術回路は７８、烏丸家八代目当主である。まあだからといって言いふらしたりはしない、魔術は秘匿するものだから魔術師と魔術使いは違うし俺は馬鹿だが、流石に秘匿はしないといけない気がする。
「やっほー紅灯くーん♪幼女のデリバリーはいるかい～？」

「学校内で幼女のデリバリーとか言わないでくださいよ夢原先輩。デリヘルじゃないんだし。」

夢原唯乃、幼女のような見た目だがれっきとした魔術師であり、高校生である。

「じゃあいらない？」

「いやいります。子守的な意味でですけど、先輩どうせ、今日も『家一人ぼっちだからぁー紅灯君のお家にお持ち帰りして欲しいな～♪てへっ♪』とかいうんでしょ？この前来た時母さんに見つかったでしょう？あの後なんて言われたかわかります？『紅灯、貴方小学生はダメよ小学生、社会的に終わるわよ。死ぬわよ死ぬわよ死んじまいなさいこのクズ。』って言われたんですよ、あの人そのうち俺の事殴り飛ばしますよいやマジで。」

「長い長いよ！というか何さ子守的な意味って！私だって高校生だよ!?守られなくていいもーんだ！」

「何言ってんですか、この前一人が寂しくて風呂にまで入ってきたのに。いやぁ先輩の身体って幼女だからチ●コが反応しなくて助かるな～。」

「アンタそれ周りに人がいる時に言わない方がいいよ……。性犯罪者だよ、傍から見たら。」

「へ？」

先輩の言葉を聞いて、俺は周りを見渡した。

放課後とはいえ学校内に残ってる生徒は多く、気付かなかったがどうやら俺らの声はかなり響いてるらしく、行き交う生徒からは冷たい眼差し（養豚場の豚を見るような目）で男の方を一瞥しながら歩いていく、時折女生徒の中からは『死ね』だの『ロリコン』だの挙句には『クソ雑魚チ●コ（ふにゃふにゃ童貞チ●コ）』だの言って待てなんだ最後の!?おい待て！酷いだろ！お前オレのチ●コ見た事ねぇだろ!?男生徒からは『犯罪者』だの『先輩ダメ人間化製造機（対女性先輩専用ダメ人間化計画ロボット）』（なんだよそれ、知らないよ俺）『だの『オッドアイ雪野郎』だの言われた、おい待て、だからなんで変なのが混ざってんだよ！お前ら何なんだよ！

「何かコイツら俺に当たり強くないですか…？変なの混ざってるし…なんだよ対女性先輩専用ダメ人間化計画って、そんな素敵素晴らしい計画知らないよ……。」

「私も知らないよ？大方どうせアレでしょ？君が変態だからでしょ。」

「変態じゃないですよ、紳士です。」

「紳士ィ？紳士のS字も無いような奴に言われてもねぇ。」

「あーはいはいそうですねー。で、なんの用です？先輩。」

いい加減この幼女から要件を聞かないと、ずっとこのつまらない寸劇を繰り返すことになると踏んだ俺は、とっとと聞くことにした、さあ早く話してくれ本当に。

「んー？英霊、聖杯、準備。わからない？」

先輩は、さっきまでのような明るい雰囲気とは打って変わって冷たい眼差しで俺を見た。英霊、聖杯、準備。……？わからないな…。

「んもー、わからないな。って思ってるねー？ダメなんだぞっ。君も魔術使いなら知識くらい持ってなさいよね？」

「なんですか、聖杯？それ十六年前冬木で出てきた聖杯戦争のやつなんですよね？」

「なんだー知ってるじゃん。」

「アレは冬木のやつですよね？こんな所に聖杯がでたーなんて聞いてないですよ馬鹿ですか？なんだったら証拠見せて下さいよ。」

「ここだとなぁ……とりあえずお家に行こう♪」

「いいですよ、まあとりあえず……。」

「とりあえず？」

俺は先輩の頭に優しく手を乗せて

「今日、夢原唯乃は烏丸紅灯を如何なる方法を用いても殺すことが出来ない。」

彼女の脳みそ、魂、心、全てに言葉を縛り付ける。そんなに効力はないが、これで今日は殺されずに済むだろう。

「何……コレ…？」

先輩は違和感を感じたのだろう、目をトロンとさせてぼーっとしてた。

「よし、じゃあ俺の家に行きましょうか。」
先輩をおんぶして学校を出た。

「貴様…一応聞くが余とマスターの味方か？」
「うおっ誰だ!?」
「貴様の背中に乗っている少女のサーヴァントだ。」
学校からの帰宅途中、俺の隣にはいつの間にか男がいた。
「サーヴァント…？あーＯＫわかったわかった、安心してくれ。俺は先輩に危害を与えるつもりはねぇよ。ただしアンタみたいのがいた時にメンドーだろ？だからああしたんだよ。」
「殺すつもりは無いが殺されるつもりは無い、と？」
「あたりめーだろうが。ああそうだ…なんなら先輩はアンタが背負ってくれ、つーかアンタがいるなら安心だ。今日のところは帰って欲しい。」
そうだ、サーヴァントとやらがいるんならコイツに任せちまえばいい。そう思った俺は黒い男に先輩を渡してそそくさと帰っていった。
「気を付けろ、この街には既にサーヴァントが余以外にもいる。殺されたくなければ早く英霊を呼ぶことだな。」

背後から、そんな警告が聞こえた。

「そーにーぎんとてつぅー♪いっしずえええにいいい契約とぉーだいこうぅー♪」

魔法陣の前で鼻歌を歌う。

蔵の中でおもしろそーな魔法陣の書き方があったので、それを実行してる途中なのだ。

「えーっと続きは…みたせ、みたせ、みたせ、みたせ、みったせー！繰り返す都度に五度～♪」

適当に、だが間違いはないように呪文を唱えて、そしておわった。

――――なんも起きないな…。

「っと…思えばなんもなかったからくノ一のコスプレ用の服置いたのはダメだったかなぁ。」

この儀式は何かしらものを置いてからやるらしい。何も無くても出来るらしいが、適当に持ってたくノ一衣装を置いていた。

「さて、寝る…ッ!?」

突如右手が痛む、目を向けると何やら刻まれてる。コレは…

「なんだコレ……？」

羽と3本に分かれた線が両方にある赤い痣のようなもの、そのようなものが俺の右手には刻まれていた。

そして、その痣に俺が目を奪われていると魔法陣が光り出した。

「っ!?うわぁっ！」

閃光、光の刃のようなソレに耐えきれず目を手で覆った。暫くすると閃光がやみ、代わりに魔法陣から声がした。

「―起動、アサシンのサーヴァントです。入力を求めます。貴方がマスターですか？」

無機質だが可愛らしい声、その声の方向をむく。

「超俺好み…可愛い……！」

ついそんな言葉が漏れてしまう程の美少女（しかもくノ一衣装だ、可愛すぎる、萌え死んでしまうだろこんなん。）がそこにたっていた。

「えっと…ですから、貴方がマスターかと聞いているのですが……って可愛い!?辞めてくださいいきなり！」

なんで俺怒られたの!?

「そのまるで、何故怒られたのかわからないという顔をやめてください、セクハラですぞ。色欲狂。」

「あっはいすみませんすみません！で、ですねその！……おそらくこの痣があるから俺が君のマスターであってるかと…。」
「…ふぅ…。」
「ねぇやめて！そんな蔑んだ目で見ないで！たつ！たっちゃうぅぅぅう！」
「気持ち悪いです、マスター。」
「あっごめんごめん。」
そうしてここに、変態とくノ一の二人組が出来てしまった、偶然、なぜ彼女が召喚された、本当にわからないが、まあ恐らく……

ソレは、俺と彼女が相性からだったのだろう、ツッコミ役が。

聖杯戦争だよ！・全員集合！・弐

中学校、そこは最高な思春期の園、幼女ではないがロリである１２～１５の少女がいるココは、私にとって天使がいる楽園（パラダイス）だ。

名乗るのが遅くなってごめんなさいね、私の名前は豊海桔梗（とようみききょう）。可愛い可愛い１４差の女の子である。…一応言っておくが、私は性的な目で彼女たちを見ていない、いや、性的好奇心は物凄く抱いてるけど、というかコレ以上言ってると私のキャラが崩壊してしまうのでやめておく。真面目、子どもっぽくてむっつりスケベなのが私なのだ。

「てか何独り言のように思ってるのさ……帰ろっと。」

ぼんやりとしていた頭を横に振ってシャッキリさせる。机の上には既に帰りの準備の済んだ鞄があり、それを手にしてそそくさと家へと向かった。

「ただいまー。」

寂れた一軒家の自宅の玄関を開け、私は帰ってきた時に言う言葉を言う。

「おっ、帰ったか大将！」

「ただいま、ライダー。」

リビングの方から声が聞こえた、どうやら今日はいるらしい。

「っと着替えないと…。」
一回着替えてこよう。
豊海家は寂れてはいるが、まあ丈夫だしそれなりに広いので結構気に入ってたりする。住人は私とお姉ちゃんの二人、両親とは別居している。毎月仕送りのお金が来るし、お姉ちゃんが働いて稼いでくれてるのでお金の方はなんら不自由ではない。
玄関から左に曲がり、廊下を歩いて私の部屋に行く、ファンシーな木札（兎さんの形に桔梗と彫られたもの、お姉ちゃんが作ってくれた。）が掛けられた部屋に着く、ドアノブを捻って部屋の中に入った。
「おかえりー！」
「っと警察警察…。」
「ストップストップストップ！なんで通報しようとするのよぉ！」
「自分の部屋に変態がいたから。」
「誤解を招く言い方はやめてよぅ！桔梗たんー！」
「はぁ……通報はしないよ、で？なんで私の部屋にいるの？お姉ちゃん。」
扉を開けたらそこには私の姉、豊海這々音（はばね）がいた。部屋の中に不法侵入していたと言っても過言ではない。
「さあ出てって出てって！」

「あーもーわかったよぉー。」
お姉ちゃんの背中を押しながら（蹴りながら）部屋から出す。
お姉ちゃんが出たので、棚から白の露出度の高いワンピース（百合の花柄のものだ、背中が大胆にあいている。）を取り出して近くにあったテーブルに置く。学校指定の白のセーラー服を脱ぎ、黒のミニスカのジッパーを下ろして脱いで下着姿（ピンクのスポーツブラに熊さんパンツ）になる、鏡で見てて思うが、私は意外と良い体をしてると思うだと思う。黒のクルクルショートヘア、赤と紫のオッドアイのツリ目、白い肌、健康的な細いお腹、おっぱいはCカップ、お尻は引き締まってるし。まあ美少女だ。
「っとさすがにこの気温でも寒くなるや…。」
ワンピースを手に取って着て、私は自分の部屋から出た。
「おっ、桔梗たん着替え終わったのーん？」
「うん、お姉ちゃん。ライダー、今日は出かけたの？」
「いや、今日はどこにも行ってねぇぜ。大将。」
金髪の短髪、黒と金を基調としたレザージャケットを身につけている男が私の（色んなものが）大きい版のお姉ちゃんと一緒にいる、彼が私のサーヴァント、ライダーだ。
「うんうん！ライダーさんは私の朝から呑んでたからねー！」
「へぇー、アンタら私のいない間にそんな事してたんだー？酒盛りかぁ？え？」

「あっ…そっ、それは…！そのー……えっ、えっとねー…ララライダダダダササササンンンンー！」
涙目でライダーに泣きつくお姉ちゃん、ライダーはオドオドと慌てていた。
「あっ、あー…オッ、オレッチハカンケイナイゼー。」
「ライダー？お酒は美味しかった？」
「まあ中々においしかったぜ。」
「共犯じゃないの!?」
「嵌めたな!?」
「嵌めてないよ…!?」
ココに、友人のような魔術師とサーヴァントの二人組が出来ていた。
「じゃあ依頼の方、宜しくなー！」
「おう、しっかりとこなさせていただくよ。。」
「うんうん！よし、コレで一人けってーい。」
じゃあね～！と巫女服の女が戸を開けて出ていく。
「しっかし…聖杯戦争ねェ…。」
オレ、御崎歌暦（みさきかれき）は何でも屋をしている。それは勿論、魔術師とかからの依頼も受け付けているのだ。金払いがいいし。

「聖杯戦争…聖杯戦争っと……あったあった。」
先程来た女の依頼は、今度この街でやる聖杯戦争に参加してくれ、ということだった。
「面倒臭いなぁ……殺し合いとかやだなぁ…。」
「親父、殺し合いすんの?」
「うおっ!?聞いてたのか…船司(こうじ)」
「和恋(かれん)姉さん声デカイからな、多分他の子達にも聞こえてるよ。」
「マッジかよー…物騒なものとは無縁な生活を送ってもらいたいんだよなぁ。」
「確かに、物騒な依頼は今まで断ってきてたもんね。なんで聖杯戦争の依頼は受けたの?」
「そんなの、お前らから危険を退けるためだろう。」
「危険…?」
「この街で聖杯戦争なんざ起きたら、お前らに危険が及ぶかもしれないだろ?それにココはお前らが住む所だ、当然守らずして何が保護者だよ。」
「普段真面目な顔してない人が真面目な顔するとなんか変な気持ちになるね……。」
「真面目な話だからね…、えてか何?オレって普段そんな真面目じゃない?」
「真面目じゃない真面目じゃない、父さんは僕達子供からはダメ親父って思われてるんだよ?」

「お前ら酷いな!?」

英霊を召喚しよう！と思ったオレは早速家の中を探しまくった。何かしら英霊に縁があるものがあるだろうなぁ……無かったら無かったでその時だし。

「パパー！パパはなにしてるのー？」

「おうつばめ、パパは今探し物をしてるんだぞ。」

いきなり背後からロリボイスで話し掛けられる。振り返ると長い茶髪をところどころ跳ねさせた鳥のような少女…まあ我が家の次女、現在小学三年生の御崎つばめがいた。

「さがしものー？」

「そうそう、さがしもの。…あーそうだ、つばめ、パパの部屋にあった本、知らない？」

「どんな本ー？」

「つばめにはまだまだ難しそうな本だ、どこかで見なかった？」

我が家にある触媒はアレくらいだった気がする、呼んでも上手くコンビを組めるかは不明だが。つばめは小さな手を口に当てて、唸りながら考え込んだ。と、心当たりがあったのかポン！と手を叩いて口を開いた。

「たしか文人（あやと）おにいちゃんがもってたよー。」

「ん、そっか。教えてくれてありがとなー。」
教えてくれたつばめの頭を優しく撫でてやると、嬉しそうに目を細めてくれた。
「じゃあ、パパもう行くからね。」
「うん♪」
つばめから教えて貰ったので、オレは文人…御崎家の次男の部屋に向かっていた。
階段を昇って、2階の五つある部屋の中の右から二つ目の扉にノックをした。
「文人ー、いるかー?」
「いるよ、父さん。」
部屋の中からは少年の声が聞こえた。
「部屋、入っても大丈夫か?」
「大丈夫だよ、別にやましいものもないし。」
やましいものってお前…まあいい、入るか。木造の扉をガチャリと開いて、部屋の中に入る。中には椅子に座りながらこちらを向いてる少年がいた。
「よう文人、あの本知らねぇか?」
少年—彼が、御崎文人。黒の短髪に黒の瞳、藍色の縁のメガネを掛けた顔立ちは普通で、体型も普通の平凡な中学一年生だ。
「あの本?えーっと…あぁ、あの本か。うん、僕が持ってるよ。」

文人は勉強机の上に置いてあった古そうな本を手に取ると、ハイ、とオレにその本を渡してくる。
「うっし、コレがあれば大丈夫だな。ちょいとこの本借りてくぞー。」
「ん、了解。」
さて、材料は揃ったし召喚するか…。
「さて……じゃあやるか。」
夜、子供らが寝た深い深い夜、俺は相棒となる英霊を呼ぶべく、魔法陣を書いて準備をしていた。
「其に銀と鉄（ｒｙ」
呪文を言い終えて待つ、右手に痛みが走ったので確認してみると、赤いタトゥーのような……そう、コレは確か令呪だ。となると…
「魔法陣が光出した……来る！」
確認出来るシルエットは俺より低いな…
「サーヴァント、ランサー。貴方が私のマネージャーかしら？」
「マネー…ジャー…？まっ、まってランサー！」
この女今なんて言ったんだ!?
困惑してる俺を、ランサーはドヤ顔で見上げて

「ええ！マネージャーよ！それで？どうなのよ。」
「あー…その、だな。令呪あるし…あぁ、オレが君のマネージャー…でいいと思う。」
「なによー煮え切らないわねー。まっ、違ったら魔力源にすればいいし…ええ、とりあえず分かるまでは貴方がマネージャーね。」
わかるもなにも、ここに居るのはオレと君だけだろ。とはいわない。殺されるような事態になったらオレは負けるからだ。英霊に勝てるやつなんて人間じゃないだろうし、オレは人間なので負けるに決まっている。
「…まあなんだ、宜しく頼むよ。ランサー。」
右手を伸ばして握手を要求する、ランサーはニッコリとしながら応じてくれた。
こうしてココに、一組のアイドルとマネージャーが生まれた。

聖杯戦争だよ！全員集合！参

「あ”～…。」
「マスター…少しは動いたらどうです？」
「やだね！」
「即答ですか…。」
「うん♪」
「何故そこでいい顔で頷くんですか…ほら、お外に行きますよ。」
「やーだー！」
はじめましてみなさま、わたし、名前をエミヤガウナともーします。
ここ、四季山市で聖杯戦争が行われるらしいので、まあとある一族のだいひょーとして来てる訳なんだけど……。何分、まだ全然始まる予定がないので今はサーヴァント……アーチャーとダラダラ待ってるつもりだった、だったのに…。
「なんでおそと行かないといけないのぉ……。」
「鍛錬です！しっかりと鍛錬しなきゃ負けちゃいますよ！」
「大丈夫大丈夫！わたしたちが負けるわけないもん！」

「なぜ言い切れるんですか？本当に負けないと？」
ジンジャのみこしょーぞくの彼女…アーチャーはりんとした顔をズズイ！と近づけてこわい声色で言ってくる。私は冷や汗を額で感じながら
「だっ、だってわたしホムンクルスだしぃ!?たかだかニッ、ニニニンゲンなんかの魔術師に負ける訳ないじゃん!?」
「本当にそうだと思いますか？」
「なっ、なにさ！なら負けるとでも？我ホムンクルスぞ？ニンゲン共よりあっとー的な魔力量持ってるんぞ!?簡単簡単。」
「ハァ…慢心、ダメゼッタイ。ですよ。そんなではいつか足元をすくわれます。」
「さーれーまーせーん～。ガウナちゃんはさいきょーですぅ～。」
「それはフラグって言うんですよ。日本の漫画だとそう言うと大体負けるんです。」
「まっ、負けないもん！アーチャー不吉なコトしか言わないからきらい！」
「貴方がだらけるからでしょう！んもう…なんでこんなマスターなのかなぁ…。」
アーチャーとの出会いはとても不思議だった。
実家から出たわたしは、交流のあったニホンジン、エミヤシローさんの家に訪れていた。
「たのもぉおおおお！シィイイロォオオオどのぉおおおおおおおおおおおお！」

「なっ、なんだ!?誰だ!?……ってガウナ？」
「ＹＥＳ！ＹＥＳ！ＹＥＳ！お久しぶり、シローさん！とりあえず中に入れてー！」
「あっ、おい！はぁ…。」
「……で、なんで来たんだ？」
呆れ顔で来た用件を問うシローさん、わたしは持ってきた荷物（実家の財産の一部と最低限の日用品と魔道具。）を置いて話した。
「実家がね、イヤになってきて家出してきたの。シローさんには悪いと思うんだけど…ココに住まわせて！」
「城の方に行けばいいじゃないか……。」
「きゃっか！一人はイヤなのー。」
「ならメイドを連れてくれば良かったじゃないか。」
「あの子たちは実家の方でていっぱいなの！今は連れてけない。」
「…というかそもそも、何が原因なんだ？ガウナの実家は確か……。」
「そう、イリヤさんと同じあそこ。…クソオヤジがイヤでね…というかわたし平和主義だし？あの家とは全然合わないっていうかー。」
「成程な…なら仕方ないか、ここに住んでもいいぞ。」
「やったー！」

ということで…私はエミヤていでお世話になることとなったのだ。それから2ヶ月くらいたった頃。どうやら聖杯戦争が開戦されるらしく、何故かアインツベルンの代表として私が選ばれたのだ。…しかも今回はマトウやトオサカは参加しないらしい。

「にしても……今回は冬木じゃないんだな、聖杯戦争。」

「冬木とは別のとこで聖杯が確認されたみたい。代物はガチのやつ、まあ少し変わってるみたいだけど…。」

「少し変わってるっていうのはどういう意味だよ。」

「本来、聖杯戦争で東洋のサーヴァントって呼び出せないの、聖杯は『西洋』のがいねんだからね。それなのに…。」

「それなのに……?」

不思議そうな顔で私を見るシローさん、いやはや本当に驚いた事があったのだ。

「私ね、さっきちょちょいとしょうかんしてきたの。サーヴァント。その……見てくれればわかるんだけど、ニホンのサーヴァントだよなぁって。……アーチャー、もう姿見せていいよ。」

そうぽつりと呟く、すると近くからはジンジャのみこしょーぞくを着た少女が出てきた。

「初めまして衛宮士郎さん、私はガウナさんのサーヴァント、アーチャーと申します。

この度はマスターのサーヴァントとして私のような若輩者が来てしまい申し訳ありません……。」

アーチャーは申し訳なさそうにあやまる。つーかシローさんは私のおかあさんじゃないぞ、

「あぁいや…こちらこそ、ガウナをよろしく頼む。コイツは危なっかしいからな…どうかみてやってくれ。」

「ええ、私がいるからにはマスターを見事勝利させてみせます！さあマスター鍛錬をしましょう！鍛錬を積めばそれだけ確実な勝利に近づけるのです！さあさあ！」

「ヤダァァァァ！うーごーきーたーくーなーいー！助けてシローさん！ヘルプミーだよシローさん！」

「頑張ってこい！ガウナ！」

とてもいい笑顔でガッツポーズをするシローさん、私は抵抗虚しく道場に連れていかれたのだった……。

ここに、二人の少女の二人組が出来ていた。

「セイバーセイバー！お話してー！」

わたしは、今日もかれに話を聞く。

「あーはいはい、今日は何を話せばいい？」
おっくうそうに話し出すかれ、セイバーはいつもそうだ。
「セイバーのお話はどれもおもしろいもの！でもそうね…今日はセイバーの親友のお話をして！」
「ああ了解だ、さて、アイツを話すのにはまずは…」

わたしのりょうしんは、今はとおくにいます。
九さいのころです、お父さんもお母さんもわたしを置いてどこかいっちゃいました。
まわりの人は死んじゃったって言いました、あなたのご両親はもういないのよって。
でもそんなのしんじません、わたしはしんじないです。ぜったいにしんじないです。
お父さんはきびしい人でしたが、絵本を読んでくれました。
お母さんは優しくて、わたしが立派なまじゅつ使いになるためにたくさん色んなことを教えてくれました。
そして、今日はその教えを全うする日です。
「素に銀と鉄。　いしずえに石とけいやくの大公。
降り立つ風にはカベを。　四方の門は閉じ、王かんより出で、王国に至る三叉路はじゅんかんせよ

閉じよ。閉じよ。閉じよ。閉じよ。閉じよ。
繰り返すつどに五度。
ただ、満たされる刻をはきゃくする
――――告げる。
なんじの身は我が下に、我が命運はなんじのけんに。
聖はいの寄るべに従い、この意、この理に従うならば応えよ
ちかいを此処に。
我はとこよすべての善と成る者、
我はとこよすべての悪をしく者。
なんじ三大の言霊をまとう七天、
抑止の輪より来たれ、天秤の守り手よ――――！」
…あとは、来てくれた人とけいやくをむすぶだけ
「…オイ、貴様が私を呼んだマスターか？ん？」
しょうかんを終えると、目の前には一人のイケメンがいました。
「…だれ？」
見覚えのないその人にといます。
「私はセイバーだ、で、貴様が、私を呼んだのか？」

「セイバー……うん、わたしがよんだの。」
「…貴様にそれがある限り、私は貴様の近くにいよう。死んだら願いも叶わないしな。…それで、マスター…貴様の願いは何だ?」
「わたしの……ねがい……。」
もし、もし、かなうなら。
「わたしは、家族が欲しい。」
「よし、そのためには勝利せねばな。まずマスター、そんな暗い顔をするな。いいか?顔の暗い船長の船なんて乗りたくないだろ?だから明るい顔をしろ、お前はまだ子供だからな。」
…いいのかな…
「貴様冒険譚は好きか?私は船長でな、私の話をしてやろう。」
ニッと笑ってくれるセイバー、わたしは、その笑顔にすくわれたんだ。

「とまあ…アイツは十二の試練を乗り越えたわけだ。…おいマスター、おい。…なんだ、寝てるのか。」
オレは幼い少女に召喚された、恐らく触媒となったのはコイツの心の中に強く残っていた冒険譚だろう。

ベッドまで連れていき、上に乗せて布団を被せる。よく寝るがいいマスター、せめてこのオレがいる時だけは、貴様は一人ではないのだから。

ここに、一人の船長と少女の二人組が出来た。

聖杯戦争だよ！・全員集合！・肆

二重人格っていうと、まあ大体の人は二つの人間が一つの体に入る……って思うだろう、まあそうだ、俺（ボク）、屍之鐘解静（しのがねかいせい）の場合もそんな感じだし。

母さん父さんと三人で、この四季山市で菓子屋『シノガネ』を手伝いながら高校に通う、順風満帆な生活を送っている、恋人はいないけれど友達はいるし楽しいからこの生活を気に入っている。

「それじゃあ母さん！学校に行ってくるね！」

「――――――。」

「ハハハ、大丈夫だよ！母さんも頑張ってね！」

「――――――。」

さて、今日も楽しんで生きよう！

いつも通り学校が終わり、家路につく。その途中で俺（ボク）は彼女に出会った。

俺（ボク）の家に着くまでには薄暗いトンネルを通る必要があるのだが、その子はいた。

「……。」

ボロボロになった球体関節の身体は何も身につけておらず、そして端正な顔は光を失っていた、恐らくは捨てられたんだろう。雰囲気としては、まるで童話に出てくるような幼女だ。一見すれば人形だが、だが、俺(ボク)は感じた、感じれた。だからこそ今から、この人形のような幼女を助けるための処置を行う為、近づく。

「助け…て…」

枯れた声、しっかりとすれば可愛らしい声になるんだろう。死にかけた幼女は、俺(ボク)に助けを乞う。

「あぁ、勿論。俺(ボク)は魔力を分ければいいのかな？」

その子の前にしゃがむ、泣きそうなその顔は、確かに頷いてた。ならば…と

俺(ボク)は、幼女に魔力供給(キス)をした。

コレが、俺(ボク)とキャスターの出会いだ。

今は両親に嘘をついて、キャスターにも菓子屋を手伝ってもらっている。好奇心旺盛で可愛らしい彼女は、菓子屋のマスコット的存在となっていた。

聖杯戦争とやらもまだ始まってないらしいし、暫くはこうして日常を送れるだろう。

ココに、二重人格の青年と童話のような幼女の二人組ができた。

聖杯戦争には監督役というものがある、しっかりルールが存在するし、サーヴァントを亡くして戦えなくなったマスターを保護したりだとかするためだ。大体は聖堂協会から派遣される、この私、萩村和恋（オレ はぎむらかれん）も聖堂協会所属の巫女であり、数年前からこの四季山市白百合神社でお世話になっている。

ここの神社はいい…もう一人、巫女も居るし地元の子供たちは遊びに来るから毎日楽しいし。

ちなみに今日は、知り合いの魔術師にマスターをしてくれるよう頼み込んでいたところだ。無事ＯＫも貰えたし残りのマスターは…狂戦士（バーサーカー）と暗殺者（アサシン）か。まあ魔術師ならまだいるし誰か召喚してくれるだろう。

後は……うん、書類とかはもう一人の巫女、梓ちゃんがやってくれてるしゆっくりと帰るとしよう。

「ただいまー！」

「おかえりなさい、和恋ちゃん。」

街中から少し離れた土地に、白百合神社はたっている。

境内の前に建てられた階段を登りあがって、挨拶をしながら鳥居をくぐると、この神

社の巫女二人目……白百合梓ちゃんがいた。歳は二十一、その長くて綺麗な黒髪と暴力的胸囲目当てに男共が来るが、まああんなもんみたらそりゃ通いたくもなるだろう。

「お疲れ様梓ちゃん！準備も良さそうださ一旦休憩にして休も休も。」

清らかな笑みを浮かべて挨拶を返してくれた梓ちゃんにそう声をかけ、私たちは境内の奥の方に行った。

白百合神社には住居スペースが存在している、広さはそこそこにあるし個室もあるのでひとつの家のようなものだ。

私たちはそこの引き戸の玄関を開いて中に入り、リビングの方に行く。

畳の敷かれたリビングには本棚、テレビ、ちゃぶ台なのがある。

その隣、台所に置いておいた冷蔵庫の中を開く、中にあったお目当てのキンキンに冷やしておいた酒を手に取ってから閉めて、近くの箱に入っていた酢イカ等のおつまみを手に取ってからリビングに戻った。

「また太陽が昇ってる時間からお酒…いけませんよ？」

呆れ顔で私を叱る梓ちゃん、お仕事してきたのに……。

「飲むよ!!!飲む!!!お酒!!!!!!」

「黙りなさい！全く神に仕える巫女たるもの清廉でありなさい！それを真昼間からダ

ラダラと！お酒なんて呑んで！」
「お仕事しましたァ～。私はお仕事しっかりしてきましたァ～。梓ちゃんはしたんですかァ～？」
「私もしっかりしましたが。」
「うっ…。別にお仕事頑張ったんだし良いじゃんお酒くらい！呑ませてよぅ！呑ませやがれよぅ！」
「このアル中巫女！ダメったらダメです！」
力づくで酒を取り上げる梓ちゃん、力じゃ到底彼女には敵わない（梓ちゃんは力仕事などがあっても大丈夫なように鍛えてるのだ。）のでそのままお酒は取り上げられてしまった。
しかしこれはいけない、何せ私はお酒を飲む楽しみで正気を保っているようなものなので、飲まなければジョジョに正キヲ失ッてしまウ……プツリ
「ガルルルル…ガゥ！」
ガブッ
「痛っ！噛んだ!?」
ゴツン
「ガゥッ…!?」

バタンキュー……

「おさっおさおさおさけぇえええ！うめぇ！うめぇよぉおおおん！」

「まさかお酒を少し飲まなかっただけで噛み付くとは……とんだ獣ですね…全く。…そういえば、お知り合いの魔術師の方はマスターをやってくださるのですか？」

酒（返して貰えた）を浴びるように飲む私に、梓ちゃんが呆れ顔で尋ねる。ゴックンと喉を鳴らして酒を飲みこんで

「見事、マスターになってもらえることになったよ。これでマスターは残り二人…まあ、令呪が出れば召喚してくれるでしょ。」

と、適当な声で答える。

「それもそうですね。…さて、私の方もやることはやりましたしあとはサーヴァントが揃うのを待つだけ、ってところですかね？」

「まあそんな所、さーさー梓ちゃんもお酒入れて今日は寝よう寝よう！」

私（オレ）は酔いが回ってきた頭でお酒を彼女に勧める。

「まだ１４時ですよ？全く…。」

そうやって小言を漏らしながらも、梓ちゃんも飲みたくなってきたのかお酒を受け取った。

人気の無い場所にある神社から、その日の夕方は女性達の騒がしい声が響いた。

さあ、聖杯戦争を始めよう。
それは、まだ見ぬ自分(せかい)を知るための物語
それは、一族の願いを叶える為に戦うものの物語
それは、別世界の自身を知ろうとするものの物語
それは、未来の宝(子供たち)を守るために戦うものの物語
それは、一族を守り、一族を壊すための物語
それは、過去を認め、未来を求めるものの物語
それは、理想を押し付けられた少年の物語
今日も通常運行な世界のちっぽけな島国の都市で行われる殺し合い。殺し殺されの命のやり取り、この物語の中で、彼らは何を得るのだろうか。